

時間性と女たち

棚 沢 直 子

- I はじめに
- II ボーヴォワールの『第二の性』
 - 1. 「生物的条件」の時間
 - 2. 歴史・文化・社会の時間

* * *

性社会関係理論とデリダの脱構築理論
- III クリステヴァの「女の時間」
 - 1. 線の時間と円環的時間
 - 2. 円環的時間における母の位置
- IV イリガライの『差異の時間』
 - 1. 男の系譜と女の系譜
 - 2. 『西洋と東洋の間で』

* * *

近代日本の『国体の本義』とコランの複数普遍性
- V おわりに 一母の時間一
 - 1. 世代関係の時間
 - 2. 世代関係の時間における母の位置

I はじめに

内容の順序と問題設定は以下の通りである。まずシモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』を取り上げる。つぎにジュリア・クリステヴァの「女の時間」とリュス・イリガライの『差異の時間』を分析する。最後に私の論文「世代社会関係を概念化する一母の位置はどこにあるか」の中で、私が時間性の問題をどう扱ったかを話す。

問題設定としては、以下の3点である。

- 1. 時間の流れの中で「革新的なもの」はどこから発生すると、それぞれが思っているか。それと関連して、よりよい女の生き方を、それぞれがどう探っているか。
- 2. 男女関係と世代関係をどう関連づけているか。このふたつの関係の中にそれぞれが母

をどう位置づけたか。

3. 時間性の問題の中に、西欧と非西欧の関係をそれぞれがどう位置づけてきたか。

II ポーヴォワールは『第二の性』で時間性をどう考えたか。

1. 「生物的条件」の時間

『第二の性』(Beauvoir[1949])の最初の章は「生物学的条件」と題されているが、ここにすでにポーヴォワールの時間性についての考え方が明確に現れている。彼女は、この章で生物が下等から高等へと進化する段階を、種と個の関係によって説明していく。つまり下等生物では種の維持が生命活動の中心になるが、高等生物になるにしたがって生命は個体化していく。問題は、高等では、種の維持と個(個体)の創造という生物のふたつの機能が、雌雄に分化してしまうことだと。よって、もっとも高等な生物である人間においては、メスだけが種の維持の機能を受けもち、オスはメスよりも種の維持にとらわれず早く個体化していく。彼女は言う。「オスの個体は、現在を爆発させ、現在を超越して、未来の創造へと向かう」(ibid,l:61,75)が、メスの個体は種の維持という機能のせいで個体に完全になりきれずに「過去に内在し、未来へと向かうことが難しい」(ibid,l:56)と。こうした文章の中に実存主義の時間性の概念と「革新的なもの」の創造についての彼女の考え方が読み取れる。つまり「革新的なもの」は、個(体)が現在の瞬間瞬間に創造していくのであり、現在以前には何もない、無であるというわけだ。彼女は、「種の維持」という表現で過去からの生物学的な記憶の伝達継承を述べたと思うが、その伝達継承は、「革新的なもの」の創造を阻害するとして否定的にしか捉えていない。

2. 歴史・文化・社会の時間

ポーヴォワールは「生物学的条件」の章の最後で、「生物学的条件から見て女は男に比べて限りなく不利だ」(ibid,l:69)が、しかし「これはひとつの条件であって、決定的な宿命ではない」、だからこの条件は乗り越えられると言う。しかし、彼女はその後の数々のインタビューで亡くなるまで「現在の段階では」と条件をつけながら「種の維持」つまり「母性」は「畏だ」と言い続けた。

続く「歴史」の章でも彼女は女がなぜ差別されたかを時間性の概念から説明していく。女は反復する妊娠出産のせいで身軽になれず「内在」を余儀なくされるが、男は外に出て戦い、大きな道具を創造し、自分の生物学的条件を「超越」して文明への一步を女より先に踏み出す。こうして時間を早く進んだ男たちが早く「主体」あるいは「精神」となって、女も含め自分以外のすべてのものを「客体」扱い、「物質」扱いすることで、歴史の覇権を握り支配してきたと。ここでわかることは、ポーヴォワールにとって生物学的時間と歴史的時間は、基本的に同じ実存主義の考え方に則っているということである。

西欧と非西欧の関係についても同じことが言える。「歴史」の章の冒頭の注は、彼女がこの歴史・文化・社会における時間の中で、西欧と非西欧の関係を断定的に述べている点で、印象深い。彼女は言う。「これから歴史の変遷を西欧の例で検討しながら見ていく。とくにその典型的な例であるフランスを中心にする。中国、インド、オリエントの女の歴史は長く変わらない隷属の歴史だった」(ibid,l:133)と。

ようするに、彼女にとって、歴史・文化・社会の時間は一見したところ二種類ある。ひとつは順調に変化するフランスを中心にした西欧の時間(西欧の内部では、男は女よりこの時間を先に進んでいく)、もうひとつは長く変化しない非西欧の時間(この時間の内部で男が女より先に進むかどうかについて彼女は何も言わない)である。彼女は日本の女の歴史など何も知らなかったし、知ろうともせずに、このように断定してしまった。

この一見ふたつに見える時間は、進んでいるか遅れているかのちがいでだけだから、実はひとつの時間性にしかすぎない。近代日本の知識人たちは、この時間性の考え方を名づけて、世界を序列化し西欧文明とその進歩を最高のものと価値づける「一元的進化論 *évolutionnisme moniste*」と呼んできた。このような時間性の中では、未来に向けて先に早く進むことに価値があるから、過去の記憶の伝達継承は、生物学的な時間と同じように重要でない。そういうものに捉われることこそ、「革新的なもの」の創造の障害になる。女たちや非西欧のひとたち、とくに非西欧の女たちは、この進歩の時間に乗り遅れて「革新的なもの」の創造ができないというわけだ。

ボーヴォワールにとって、この時間の中で先に進んでいく男たちがつくる関係、つまりフランス革命以来の兄弟同士関係 *fraternité* の中に、女が参入することこそ女性解放だった。彼女は女も自分の生物学的条件を捨てて男と同じようにこの時間を順調に進むように提唱する。女のよりよい生き方はこれしかない。彼女が最後まで「母になることは異だ」と言い続けた理由がここにある。社会文化的記憶の伝達継承における母の位置の問題は、彼女には興味さえなかった。したがって彼女は世代関係(というより母子関係)の否定的な側面を強調しただけだった(Tanasawa[2002],棚沢[2003])。

ボーヴォワールは、フランスが大革命以来、19世紀を通じて練り上げてきた栄光の西欧思想に最後の輝きを添えたように私には思える。『第二の性』は19世紀から21世紀現在までの西欧思想の歩みの道筋に立てられた大きな指標である。

もちろん『第二の性』はよく読めば、矛盾だらけで豊富な内容を秘めているのを私は知っている。私は『第二の性』の新しい翻訳に参加したひとりだから。私はここで単純化して語っているだけだ。以下、クリステヴァやイリガライについても同じことが言える。

* * *

ボーヴォワールの思想的な後継者とされる社会学者クリスティーヌ・デルフィの理論を批判継承

しつづ構築された性社会関係社会学フェミニズムについて一言。私から見ると、このフェミニズムに関わる研究者たちは、ボーヴォワールだけでなく現在まで続く西欧の無自覚的な時間概念であるこの「一元的進化論」の枠組から、それほど出ていないと思われる。その理由は3つある。1. 性社会関係論の構築者たちにとって、非西欧は視野になく、比較は「現在の段階では」ヨーロッパ共同体の内部に限られている。この内部で全世界に共通な普遍的と称する理論をつくろうとする。2. 男たちが独占してきた「中立性」「一般性」（つまり普遍性）を女も担いたいと権利要求するデルフィたちの25年来の考え方に無自覚的に賛同している。彼女たちはイリガライのような差異主義者を批判するあまり、この「中立性」「一般性」と「男性性」とどこがちがうのかの研究を25年間していない。一步譲って、「女性性」や「男性性」など認めないし「普遍性」そのものには性がないという彼女たちの主張には一理あると私も思う。しかし、この普遍性こそ抑圧的であり、性差別だけでなく非西欧差別までもしてきた大本であることを、なぜもっと分析しないのか。ようするに、彼女たちが性差別と言うとき、それは男を基準にして男女の距離を測っているのであり、その逆ではない。その逆は差異主義になるからだ。女を基準にして差異主義にならない理論をつくるのは、いくらでも可能なはずなのに、それをしていない。3. 世代関係に最近言及し始めたが、世代関係が男女差別の伝達継承に役立つとの記憶・伝達継承の否定的な側面だけ強調する傾向があり、その中で「革新的なもの」の創造については考察しない。母の分析も、世代関係における分析でなく、父との比較でいかに母が差別されているかを告発することからわかるように、父母という男女関係の中での分析に力点が置かれているから、彼女たちの母の分析から、ボーヴォワールを越えるような時間性の考え方は「現在の段階では」出ていない（棚沢編 [1998] , 棚沢他編 [2006b]）。

これに対し、時間性についての考え方の僅かな進展は、私に言わせれば、デリダとその周辺からくると思われる。彼は、アメリカで脱構築主義の創始者とされた。というように、初めのうちは、構造を破壊するひとというイメージが強かった。しかし、晩年のルディネスコとの対談を読むと、彼が思想の遺産継承を基礎に思考していることに気づく。つまりボーヴォワールのように生物学的な種の維持の解釈から始めない、生物学から切断したかたちの文化・思想の伝達継承である。考えてみれば、脱構築という「革新的なもの」は、この文化・思想の伝達継承を前提にしているのであって、この中でしか「革新的なもの」は生まれないのだ。過去の継承を前提にしている点で、ボーヴォワールにはない「革新的なもの」の考え方がある（Derrida/Roudinesco[2001]）。

III クリステヴァは「女の時間」の中で時間性をどう考えたか

1. ふたつの時間：線的時間と円環的時間

ジュリア・クリステヴァは、一時期デリダと「同じ道を歩む仲間」だった。また彼女は最初の小説『サムライたち』を書いたときに、ポーヴォワールの『レ・マンダラン』を強く意識していたことは、本人が言っているとおりである。彼女の女性思想は、デリダを考慮に入れながらポーヴォワールと自分の距離を測ることにつくられた部分があると思う。

フランスでは、とくにフェミニズムの風土では、彼女の作品はほとんど読まれていないし、彼女が『外国人』(Kristeva[1988])扱いられているのを私は知っている。それに、彼女がゴースト・ライターを使っているといううわさも流れている。たしかに、1990年以降の彼女の書き方はまったく変わってしまった。しかし、私から見ると、少なくとも1980年代前半までは、彼女は彼女自身の書き方をしている。私にとっては、現代の大部分のフランスの女性解放論者たちが、普遍主義か差異主義かのどちらかに組することを余儀なくされてきた中で、クリステヴァは、外国人ゆえにもつことのできる距離のおかげで、フェミニズムを含めたフランスの女性思想を、1970年代にすでに、ひとつの全体として捉えた稀なひとである。彼女の思うその全体は、論文「女の時間」(クリステヴァ[1991],pp.115-152)に描かれている。これは、彼女が、ほんの短期間、女性解放運動に参加した4年後の1978年に書かれたもので、『魂の新しい病』(Kristeva[1993])に大幅に加筆訂正されて再録された。

彼女はこの論文でニーチェにならって時間を二種類に分ける。ひとつが線的時間、もうひとつが巨大な円環の時間である。線的時間は、私たちがごく普通に暮らしているときに感じる、いわば歴史の時間であって、この時間を西欧人はとくに強く意識してきたし、ポーヴォワールの一元的進化論の時間もこの中に含まれると思う。これに対し、巨大な円環の時間は、私たちの無意識的な記憶の奥底に普段はあるが、ふとした時に感じられる、いわば人類学の時間であり、西欧、非西欧に共通して流れている。というように、彼女がニーチェ以前にはあまり気づくことのなかった円環的時間、ポーヴォワールのようなひとなら非西欧のものとして退けかねないこの時間の存在を指摘し、西欧にも流れているとしたことは、意味があると私は思う。

2. 円環的時間における母の位置

さて、クリステヴァはこのふたつの時間を男女に振り分ける。線的時間は男が指導権を握ってきたから男の時間、円環的時間は女の生物学的な身体のリズムに合致しているので女の時間というように。

さらに彼女はこれらをフェミニズムの第一世代、第二世代にも振り分ける。彼女によれば、19世

紀から始まりボーヴォワールを通じて現代に至るまでの男女平等を権利要求するフェミニズム第一世代は、この線的时间に男とまったく同等の資格で参入することを渴望してきたと。しかし、1968年5月革命から始まったフェミニズム第二世代は、線的时间を拒否することで、男にはできない「革新的なもの」の創造をめざしている。何よりも女の身体の永遠反復のリズムや女のセクシュアリティを考慮する創造だから、男は主導権が握れない。フランス女性解放運動の初期に試みられた女の身体やセクシュアリティをことばで表現しようとするエクリチュール・フェミニヌ（女のことば）の創造がこれにあたる。

しかし、クリステヴァは、このように線的时间を拒否し円環的時間に連なろうとする女たちの生き方には大きな危険が待ち構えていると言う。なぜなら、この円環的時間を支配しているのは、精神分析的な用語で「太古の母」の記憶、「万能の母」崇拝というファンタズムだからだ。

彼女は、この「女の時間」執筆のあと、精神分析の分野で「おぞましい母」理論(1980年-1982年)(Kristeva[1980],クリステヴァ[1991]pp.153-218)を世に問うことになる。その理論は以下のごとくである。子どもにとって、母は、まず身体の中で、誕生後はすぐそばにいて養ってくれる存在である。母の身体のイメージは、子どもが自己形成していくときに必要な記憶の集積庫(プラトンのことばでコーラ、つまり母胎)のイメージと一致する。「革新的なもの」の創造はこの集積庫から引き出すことになるのだが、その際母が万能であることを否定し、この「太古の母」の支配から逃れ出なければ、「革新的なもの」の創造はできない。母との融合的な関係を切断し、母を「おぞましいもの」として捨てるのが、子どもの自己形成の第一歩になるのである。

ボーヴォワールに比べたクリステヴァの新しさは、子どもが自己形成の一步を踏み出し、歴史の時間へと参入するときに、子どもにとっての母のイメージを考察したことだろう。

ではクリステヴァの母理論の限界はどこにあるか。私が思うに、クリステヴァの母は、つねに子どもから見られた母、子どもの記憶の中にある母であって、今ここで子どもとともに生きていく母、生きていくから変化していく母、社会学の用語で言えば社会的な行為者 *actrice sociale* としての母ではないことだろう。だから母のイメージは「太古の母」として固定してしまい、永遠反復の円環的時間の中にしかない。生きていく母は線的时间の歴史の時間の中にも存在するのに、である。したがって、永遠反復の円環の中に子どもを取り込むような母は、子どもの順調な成長に障害になるから、否定する以外はないのである。クリステヴァにとって、記憶を伝達継承させる母がもし存在するとしても、それは子どもを退行させる母と同意語になるだろう。

クリステヴァは、男女関係の分析ではボーヴォワールを継承しつつも、ボーヴォワールにはできなかった親子関係の中でもとくに母子関係という視点を導入し、西欧思想における母の位置を、イリガライやコフマンと並んで、初めて明確にしたのである。しかしその母は子どもによって否定さ

れる母でしかなかった。子ども、大人、高齢者とそれぞれが刻々と変化する世代関係の中での母は考慮の外にあった。クリステヴァの母子関係は乳児期に留まったままである。そのせいで女のよりよい生き方への彼女の展望は、それほどポーヴォワールから出ていない。女も母を否定することで男と同じように線的歴史の時間に、結局は、参入していくということ以外にはないからである。また最終的に、時間性的問題に関わる西欧と非西欧の関係についても、同じことが言える。1974年に旅行記『中国の女たち』(Kristeva[1974])をアントワネット・フーク率いる女性出版社から出版したクリステヴァも、毛沢東主義の流行が終わったときに東洋とくにアジアへの思い入れを捨てたように、以後アジアについての言及は一切ない。

IV イリガライは『差異の時間』で時間性をどう考えたか

1. 男の系譜と女の系譜

イリガライもまた親子関係を思想の中心においている。しかし、クリステヴァが母子関係の中でも母息子関係を分析したのに対し、イリガライの理論の主題は母娘関係である(棚沢[1996])。

彼女は、ギリシャ神話、ギリシャ悲劇にさかのぼって分析し、西欧文化社会の成立基盤にあるのは、「象徴的に殺されて身体と化した母」と「娘の交換」であったと結論づける。以後、西欧の人間関係は男-男関係(父息子関係、息子-息子関係)になり、母の身体と娘の交換はこの男-男関係の系譜を成立させる「つなぎ」としての物質的な機能でしかない。彼女は『差異の時間』(Irigaray[1989])で、このような男同士関係の系譜の中だけに流れる時間と平行させて、切断されてしまった母から娘へと流れる時間、女から女への系譜を再生し、男のものとはちがう革新的な女性文化を創造しなければならないとする。

イリガライの〈母〉の扱いはクリステヴァと正反対である。クリステヴァは、女も母を否定しないかぎり、よりよい生き方も、「革新的なもの」の創造もできない、それは男も女も同じだとするのに対し、イリガライは象徴的に殺された〈母〉を再生し復権しないかぎり、女の側からの「革新的なもの」の創造も、女のよりよい生き方もできない、女性文化の創造は女にしか担えないのだからと主張する。イリガライがフランスで差異主義者とか女の特殊性の信奉者と言われるゆえんである。

2. 『西洋と東洋の間で』

イリガライは西欧文化社会の分析からこうした主張にいたったのだが、『西洋と東洋の間で』(Irigaray[1999])ではこの分析を拡大して、「男の普遍性」と「女の普遍性」は全世界に共通で、

それらの間の差異も普遍的だとの考え方を述べている。彼女はインドのとくにヨガを研究し、実践したと称しているが、東洋でもインド以東には興味がないようで、当然中国や日本についての言及はない。

* * *

ついでに、日本近代について一言。このイリガライの男女関係についての考え方にあまりにもよく似た考え方を、西欧化されていく日本近代の中にさらに誇張されたかたちで見い出せるからだ。ただし、男女関係についてではなく、西欧 - 非西欧（ここでは日本）の関係についてであるが。

ことほどさように、西欧の男たちに主導された、全世界を普遍性の名のもとに一元化していく、進歩を価値とした西欧近代の時間性には、西欧内部でも、非西欧においても、反発を引き起こす強い影響力があるようだ。この時間に乗り遅れた女たちや非西欧のひとたちは、遅れたひととして序列化されないように、自分たちは「ちがう」「特殊だ」と主張せざるを得なくなる。日本近代の場合は、西欧の帝国主義に巻き込まれて植民地化されるという直接的な脅威があったから、西欧とはちがう近代国家のアイデンティティをつくり、その「特殊な」アイデンティティを旗印に戦争を引き起こして、逆説ながら西欧を模倣するやり方でアジアを植民地化する道を選んでしまった。

さてその日本的アイデンティティに関わる、日本近代がたどりついた公式的な時間性とは、西欧的な進歩する時間とは正反対であって、日本は古代から近代までまったく変わらないとする万世一系の天皇制に依拠した不変性（あるいは無時間性）だった。この時間性は西欧的な時間性の枠外にあると想定されている。もし枠内に入ってしまうと、すぐさま西欧から時間が停滞した日本などと後進国扱いされてしまうからである。古代から日本の最高神は、太陽神たる性のはっきりしない（どちらかといえば女性的な）アマテラスだったが、この神を西欧に対抗して唯一神的につくり変えると同時に、アマテラスと天皇は一体であるとした。つまり天皇はあらためて現人神にされたのだ。こうして日本文化の記憶の伝達継承は、アマテラス - 天皇がモデルになった性のはっきりしない親と子との関係によってなされるということになった。以上は1937年に文部省思想局が当時の日本最高の知識人たち約30人に執筆させ発行した『国体の本義』（文部省[1937]、棚沢直子[2006a]）に記述されている。このような不変性を守るための伝達継承の中には、「革新的なもの」が入りこむ可能性はゼロだった。

* * *

以上のボーヴォワール、クリステヴァ、イリガライなどの女性思想家たちは、「男は精神、女は物質」という西欧思想にある自明の理を暴き出すことで、客体あるいは物質にされた女がどのように主体あるいは精神になっていき、どのように男の支配する歴史の時間に参入していくかを課題にしてきた。ただし、彼女たちの考察する歴史の時間は、デリダと同じように、西欧内部だけのこと

である。その意味で、クリステヴァ、イリガライもまた、非西欧を視野に入れながらも、結局は、ボーヴォワールと同じようにこれまでの西欧思想の「自己充足性」から逃れることはできなかった。しかし、フランソワーズ・コランはちがう。彼女は西欧的な時間が全世界の指導権を握るために編み出した一元性に基づいた「普遍的なもの (universel ou mono-versel)」自体を問題にする。彼女によれば、アメリカの地域研究で流行している「文化の多元性」の発想は、この「普遍的なもの」を打破することにはならない。多元性にはその多元を判断する一元的な基準が隠されているからだ。彼女は一元でも多元でもない「複数の普遍的なもの」(pluri-versel)を提唱する。西欧と非西欧の間に現在あるちがいは、普遍的でも固定的でもない。たとえば、非西欧からもうひとつ別の「普遍的なもの」を発信すれば、西欧の中でこれまで見えてこなかったことが暴き出され、「複数の普遍的なもの」を非西欧と共有していくことになるだろうと。以上の彼女の考え方は、『女の位置』の中に収録された彼女の論文 (Collin[1996])、彼女のハンナ・アレント論 (Collin[1999])、来日の際の彼女の発表「対話的な複数の普遍に向けて」(コラン[2006])などで披露されている。

V おわりに 一母の時間一

1. 世代関係の時間

私は、10数年の研究を踏まえたうえで、論文「世代社会関係を概念化する一母の位置はどこにあるのか」(Tanasawa[2004])を書いた。世代関係なる概念用語を使用するのは、フランスの社会科学・人文科学分野では1990年代以降のことだそうだから、「世代関係の時間」もまたかなり新しいテーマだと思われる。世代関係の時間における母の位置についての私自身の考察も付言して結論に代えたいと思う。

世代関係は、ボーヴォワールがしたように「種の維持」の用語で生物学の中に閉じ込めてしまうか、社会科学(もしかしたら人文科学もそう)の分野では、「家族」という私的領域の中に閉じ込めて、これまで研究対象にはしてこなかったのではないか。フランソワーズ・コランは、彼女のハンナ・アレント論で、西欧の民主主義が、男女関係だけでなく何よりも世代関係を私領域に閉じ込めることで、成立してしまったと言う。以後、世代関係は、とくに力関係としての世代関係は、現在までタブー視されてきたのである。

しかし、私に言わせれば、フランスの精神分析系の女性解放理論において、以上見てきたように親子関係だけは考えてきたと思う。では、親子関係の用語で考えるのと、世代関係の用語で考えるのでは、どこが決定的にちがうのか。二点あると思われる。1. 親子関係では、とくに精神分析系においては、父母はつねに子どもから見られる対象でしかない。世代関係ではそうではない。2. 子ども、成人、高齢者と刻々と変わっていく親子関係という視点は、とくに精神分析にはない。子

どもは小さい子どものままであり、父母は、とくに母は、子どもの記憶の中に閉じ込められたままである。世代関係を考察するときは、この関係の変化を視野に入れなければ、見えてこないものが多くある。

というわけで、私は世代関係の用語を使用して、時間性的問題を考察したいと思う。したがって、私の思う母は、人文科学で「主体」としての、社会科学で「社会的行為者」としての母である。ただし、刻々と変わる世代関係という視点は、私の論文でもあまり強調されていない。この論文の執筆以後にさらに考えていることだから、私にとってもまだかなり新しい。

世代関係における時間は、クリステヴァの言う線的時間と円環的時間をあわせもつような、近くから見れば螺旋状に、遠くから見れば直線的に、ゆっくりと着実に動いていく時間だと私は思う。この時間の中で、「革新的なもの」はどこからくるのか。それは、社会文化的な記憶が伝達継承されるその只中に生まれる。フランス語の世代 *génération* の第一の意味は、まさに「誕生」「発生」「生成」であることを銘記したい。世代関係の中の「革新的なもの」は、フランス語では *innovation* でなく *novation* だとコランが言う。つまり古いものをつくり直して新しくするという意味の *novation* である。この「革新的なもの」は伝統の中で生まれる。つまりボーヴォワールのような *ex nihilo* から(無から)ではない。非連続は連続の中でしか見えてこないのだ。世代関係の時間の中では、世代継承、世代断絶、世代革新がほとんど同時に起こることを忘れないようにしよう。

2. 世代関係の時間における母の位置

フランスでは1970年以来、父権が親権という用語に置き換えられ、母も親権に参加できるようになった(日本は法的には1947年)。時間性の中での親権は何を意味するか。それは、私たちの社会文化の記憶を順調に子どもに伝達継承させる機能だと私は思う。

ところで、この伝達継承の保障としての親権について、これまでの父権と等価と考えてしまっただけは、まず見えてこないものがある。それは母が担ってきた役割から見えてくる。歴史的に言って、庶民階級ではおそらくはつねに、それ以上の階級ではフランスの場合里子に出さなくなった近代の後期からは、子どもが世話をするひとに依存している乳児期、幼児期において、母は父よりも子どものそばにいて世話をしてきた。子どもが依存 *dépendant* から自立 *indépendant* へと成長していく時期を、母は父よりも見守ってきた。伝達継承の中の「革新的なもの」は、子どもが自立して初めて表現されるものである。つまり現代の母は、父とともに世代継承の保証者であるだけでなく、父よりもさらに世代革新の保障者でもあるはずなのだ。このような母は、刻々と変わる世代関係の中での社会的行為者としての母と規定しなければ、見えてこない。今後、父もまた、乳児期からの世話に母と同等の資格でさらに参加すれば、母とともに世代革新の保証者になれるはずである。母は

「太古の母」「万能の母」のイメージのみに固定されてはならない。そのためには、母自身が社会的行為者であるとの自覚をもち、早い時期から子どもと分離していく努力が必要だろう。

(2004年3月13日完成)

参考文献（アルファベット順）：

Beauvoir, Simone de [1949], *Le Deuxième Sexe*, Paris : Edition Gallimard

(井上たか子/木村信子監訳[1997], 『決定版 第二の性 I 事実と神話』, 中嶋公子/加藤康子監訳[1997], 『決定版 第二の性 II 体験』, 新潮社。本稿では原書から直接訳し縮約したところもある。私も参加した訳本の訳とはかなりちがうが、対応ページを一応記しておく。p.50, p.61, p.94, p.96, pp.93-95, p.57, p.357)

Collin, Françoise[1996], “La raison polyglotte ou Pour sortir de la logique des contraires”, in Ephesia(éd.) : *La Place des femmes : Les enjeux de l'identité et de l'égalité au regard des sciences sociales*, Paris : La Découverte, pp.669-679

Collin, Françoise[1999], *L'homme est-il devenu superflu? Hannah Arendt*, Paris : éd. Odile Jacob

コラン, フランソワーズ [2006], 「対話的な普遍に向けて」, 棚沢直子・中嶋公子編『フランスから見る日本ジェンダー史』, 新曜社 (予定)

Derrida, Jacques/ Roudinesco, Elisabeth [2001], *De quoi demain... Dialogue*, Paris : Fayard/ Galilée

Irigaray, Luce [1989], *Le temps de la différence*, Paris : Hachette

Irigaray, Luce [1999], *Entre Orient et Occident*, Paris : Grasset

Kristeva, Julia [1974], *Des Chinoises*, Paris : des femmes

(丸山静・原田邦夫・山根重男訳[1981], 『中国の女たち』, せりか書房)

Kristeva, Julia [1980], *Pouvoirs de l'horreur, Essai sur l'abjection*, Paris : Seuil

(枝川昌雄訳[1984], 『恐怖の権力<アブジェクション試論>』, 法政大学出版局)

Kristeva, Julia [1988], *Etrangers à nous-mêmes*, Paris : Fayard

(池田和子訳[1990], 『外国人、我らの内なるもの』, 法政大学出版局)

クリステヴァ, ジュリア著, 棚沢直子/天野千穂子編訳[1991], 『女の時間』, 勁草書房

Kristeva, Julia[1993], *Les Nouvelles Maladies de l'âme*, Paris : Livre de Poche

文部省[1937], 『国体の本義』, 文部省

棚沢直子[1991], 「クリステヴァの女性思想」, 『女の時間』, 勁草書房, pp.235-271

棚沢直子[1996], 「イリガライの母娘関係を読む」, 『母と娘のフェミニズム』(水田・北田・長谷川編), 田畑書店, pp.47-76

棚沢直子編 [1998], 『女たちのフランス思想』, 勁草書房

Tanasawa, Naoko[2002], “Les rapports sociaux de génération: une nouvelle conception?”, *Cinquantième du Deuxième Sexe*, sous la direction de Christine Delphy et Sylvie Chaperon, Paris : Editions Syllepse, pp.254-258

(棚沢直子 [2003], 「世代関係は新しい概念か?」, 『言語と文化』(東洋大学) 第3号, pp.109-115)

Tanasawa, Naoko[2004], “Conceptualiser les rapports sociaux de génération : quelle place pour la mère”?, *Les rapports intergénérationnels en France et au Japon, Etude comparative internationale*, Ouvrage coordonné par Alain Bihir et Naoko Tanasawa, coll. Logiques Sociales, Paris : L’Harmattan, pp.37-58

棚沢直子[2006a], 「『国体の本義』読解—西洋の世界性・日本の特殊性」, 棚沢直子・中嶋公子編『フランスから見る日本ジェンダー史』, 新曜社 (予定)

棚沢直子他編[2006b], 『フランスから見る日本ジェンダー史』, 新曜社 (予定) とくに序文、第一部のまとめ、第二部のまとめ、あとがき参照。

(本論はフランスのストラスブール市マルク・ブロック大学の社会学部セミナーにおける発表の原稿である。2004年3月24日午後2時より約40分間(討議1時間程度)、プラターヌ・A24教室でなされた。参加者は20名程度。大学教員、研究者そして学生だった。使用言語はフランス語だったが、原稿は日仏両語で同時期に書いた。フランス語と日本語で全体の内容は同じでも、どれくらい細部を書き換えなければならないか、自分で知りたかったからである。今回、論文調に書き直し、僅かながら訂正した。2005年9月14日記)